

カナブンの色彩変異と分布について

(兵庫県昆虫相資料・286)

高橋寿郎

カナブン *Pseudotorynorrhina japonica* (Hope) は、有名なシーボルトが日本で採集した標本(産地不明)をライデンの De Hann が F. W. Hope に送り、*Rhomborrhina japonica* Hope と新種記載された(Hope, 1841)。これが本種に学名が与えられた初めである。

Burmeister (1842) は *Rhomborrhina opalina*, *R. clypeata* の 2 新種を Japan 産で記載しているが、ともにカナブンのことである(中根(1979)は1976年にライデンの自然史博物館でシーボルトが日本で採集したクワガタムシを中心にした甲虫を調べた結果を発表しているが、どの種も日本の詳細な産地を記していない。そのような記録はないのかもしれない。また最近、上田(1970)がシーボルトの標本を調べ、その結果を発表している。いろいろ参考になるが、具体的な甲虫についての報告はない)。

Motschulsky (1860) は日本から *Rhomborrhina clypeata* Burmeister を記録したが、日本の産地名は記されていない。

Waterhouse (1875) は "*Rhomborrhina japonica* Hope, very common in all the islands" と記し、初めて本種が日本では普通種であるという記事が出てくる。

具体的な本種の日本での記録はそれまで出てこなかったのであるが、Harold (1876) は Hiogo (神戸) 産を初めて報告している。ついで、Heyden (1879) も Hiogo 産 1 ♂ 4 ♀ を記録している(Hiogo は神戸のことであり、採集者は当時神戸にいた Lenz という商人)。

その後もヨーロッパ人による本種の記録はあり、具体的な産地と産出状況などについて詳しく報告されたものとしては、Kolbe (1886) がある。その報告では "In Japan auf allen Inseln und auch in China gefunden. Fusan-Söul 6. Juli-15. August. 1884" と日本と中国の産を報じるとともに朝鮮での産地を明記している。Lewis (1887) は *Rhomborrhina clypeata* Hope, *R. sequammulifera* Thoms., *R. glauca* Thoms. を全て *R. japonica* のシノニムに処理している。同時に *R. japonica* について "This

variable species is extremely abundant, and on tree Mr. Pryer has taken 125 specimens in twenty-four hours”と初めて具体的な数字を示して本種が非常に多くいることを報告している。

松村(1898)には、本種は図もついて学名は *Rhomborrhina japonica* Hope で出てくる(p. 173)。これが邦人による初の図での紹介になるのではないだろうか。松村(1906)でも図示をしており、これは日本で初めての図鑑図示になると考えられる(p. 81, pl. 47, f. 5)。

Arrow(1913)の論文では、本種には単に学名だけが与えられて(*Torynorrhina* 属)、なんらコメントはついていない。

Schenkling(1921)の W. Junk Coleop. Cat. にも *Rhomborrhina* (*Rhomborrhina*) *japonica* で示されている。Südchina : Kiang-si から記載された *R. ignita* Nonfr. は、本種のシノニムにされている。

新島・木下(1923)では記載文とともに産地として China, Korea (Fusan-Söul), Japan (very common in all the islands), 熊本, 東京, 熱海, 秩父, 京都, 播磨が示されており、同時に“本種は最も普通種なるも北海道に産せず。変種の記載されたものあり。即ち var. *clypeata* Burm. にしてその形短く幅広きものなり。しかれども予等の標本にては形状, 色彩において多少の変化を認む以外特に区別し難い”と述べている。

Okamoto(1924)は濟州島の昆虫相をまとめたが、そのなかでカナブンについて次のように記している。“*Rhomborrhina japonica* Hope. Only one specimen taken by the author and T. Kurisue in late June, this is closely allied to the typical Japanese form. It is relatively rare in Korea, but very common on all the islands of Japan. Found also in China (Kolbe).”

カナブンには形が短く幅広のものがいたり、色彩の変化が若干あるという点は新島・木下(1923)も述べているが、加藤(1933)による原色図鑑でカナブンの変種としてアオカナブンの色彩をした標本が図示されている。小寺(1933)は、カナブンにはアオカナブンと色彩的に非常によく似た個体があり、両者の区別は困難であると図を入れて紹介した。しかもその文中で、カナブンは色彩変化に富んでいて、クロカナブンとしか思われなような藍黒色でカナブンの域を脱しているもの、さらにはほとんど赤色に近いものがあると記している。

その後、色彩変化についてどのような関心があったのかを文献によって眺めて

みることにする。もっとも十分な文献を所有していないので、はなはだ不十分なものとなっている。

関(1933)では“ルリカナブン(仮称) *Rhomborrhina* sp. クロカナブんとアオカナブンの間のようなもので全体黒藍色で前胸背は明らかに藍色である。1928年採集せるものでそれ以来得たことなし。クロカナブンの変種かと思われるが不明”とされている。

蓮見(1934a)では“コンイロカナブン(仮称) *Rhomborrhina* sp. 1933. 8. 2に採集せるものにして全く黒藍色にして前胸背は藍色、後翅の色はクロカナブンよりアオカナブンに似る。先に関公一が Vol. 1, No. 3 に書かれた甲虫目録中のルリカナブン(仮称)ならんか?”としている。関(1934)は“*Rhomborrhina nigra* Saunders アオグロカナブン”と学名までつけて記録している。これは加藤(1933)に図示されているものによっていると考えられ(実際は光沢がこれほどでなく体型も異なる)、“*Rhomborrhina japonica* には変化多く、その色彩・体長にも種々のものがある。*R. unicolor* と同様の色彩を有するものも居る”といったコメントもついている。

加藤(1935a)はカナブンの色彩変化について“カナブンの一種で全体が暗赤紫色のものが時々アヲグロカナブン(?)として記録されるが、これはカナブンの変種で、真のアヲグロカナブン *R. nigra* Saund. は翅鞘端が強く棘状に突出しているので明瞭に区別出来る”とし、加藤(1935b)では“茶褐色又は青茶褐色、時として著しく緑色を帯ぶるもの又は青紫色のものもある”と記している。

福田(1935)は宇都宮付近での観察記録として“カナブン *Rhomborrhina japonica* Hope 変種の記録。全体暗青紫色を呈するもので、今迄各地よりアヲグロカナブン(?)として報告せられたるものを指すもので、今夏市外峯高農付近の櫟林にて2頭採集す。黒羽町付近にて現在まで7頭採集せられて居り、これから推して本種の当地方に於ける分布は比較的多いようである”と報告している。

樋田(1937)は三重県の本種について“sp. アカカナブン(仮称)、カナブンに類似するも美麗なる赤紅色を呈し、別種と思はれる。或はカナブンの変種ならんか”と報告している。1930年代は、わりとカナブンの色彩変化についての報告を見ることができる。

石田(1973)は“伊豆式根島のカナブンでは色彩はすべて緑色に赤銅色を帯びる型で、その中に赤味の強いもの(特に翅鞘の赤いもの)が2♂1♀あった。す

べて緑色を基調とするものであり、本州で稀にみられるアオカナブンに類するような緑色ではなく、これよりうすい感じである”としている。

さらに石田・伊藤（1976）は“伊豆諸島のカナブンは、緑色を基調としてこれに銅～赤銅色光沢をおびるもの、全く緑色のもの、銅～赤銅色でわずかに緑色をおびるもの、本州のものの変異の範囲に入るものである”とかなり詳しく色彩変化に言及している。

図鑑類には本種の色彩変化について言及したものがあまり見当たらないが、伊賀（1955）では色彩変化を“通常褐色味をおびた青銅色光沢のものが多いが、著しく赤味を増すものより青味をおびた一見アオカナブンに似たもの、また稀に紫藍色光沢をおびるものまである。樹液に集まるごく普通の種である（属名は *Torynorrhina* - 筆者注）”と解説している。

日高（1982）では、カナブンの色彩変化と題し、基本型・緑色型・赤色型の色彩変異があるとして、この3型のカラー写真が出ている。

黒沢（1985）では、カナブンについて“つやのある唐金色、赤または緑を帯びることが多く、ときに全体が赤銅色、緑色、藍色、藍黒色、赤黒色を呈す。樹液熟果に集まる”と解説している。

戦後、特に最近では、各地での本種の記録はあっても、その色彩変化について詳しくとりあげた報文はあまり目にすることがなくなったような気がする。これは本種が日本全土に産する最普通種（実際にはそうではないようだが）であることが災いして、あまりこの種について関心が払われていない結果と思われる。都市周辺では戦前に比較して、比較的個体数が減少したというか目にふれる機会が少なくなってきていることも原因のひとつかとも思う。

ところで兵庫県産の色彩変化については、それほど顕著な変化が見られない。緑色を基調として全体が赤銅色、緑色といった一般的な変化が見られるが、赤色が強いといった傾向のものはほとんど見られない。だがそれらに混じって、かつて関（1934）が名づけたアオグロカナブンにぴったりの色彩をした個体が得られている。並べると、色彩ではカナブンと同一種と思われぬような藍黒色の色彩をした個体群である。このようなカナブンは全国的に見られるものかどうかよくわからない。筆者の手許にあるのは、次の個体である（いずれも兵庫県産）。

能勢妙見山（1♀，1982-VII-30）。川西市多田（1♂，1959-VII-16）。神戸市

鳥原 (1 ♀, 1965-VIII-8, 1 ♂, 1966-VIII-7), 須磨天上川 (1 ♂, 1939-VIII-18).
 明石市明石公園 (1 ♂, 1978-VI-29, 1 ♂, 1978-VII-12). 加東郡社町三草 (1 ♀, 1989-VII-6).

多くのカナブンのなかで、非常に目立った異なる色彩のものが得られている。これは単に突発的に出てくるものなのか、それともこのような色彩のものがある程度出てくるものなのかよくわからない。広い範囲での多産地の個体によって色彩変化のパターンがあるのかどうかを調べると面白そうではあるが、かなり困難な点があろう（最近、大阪のS社からカナブンの色彩変化ということで和歌山県有田郡湯浅町山田で採集されたカナブン15♂9♀-5♂3♀ 1993年7月10日, 5♂3♀ 1993年7月21日, 5♂3♀ 1993年7月30日採集-を送ってもらった。色彩変化があり大体において兵庫県に産するものと同じくらいの変異のように思われるが、なかにかなり赤味がかったものが2♂3♀あり、うち1♀は特に赤味がかっていた。このような標本は兵庫県下で採集したものではほとんど見たことがない。御坊市亀山産1♂1♀ (1993・VII・10) は緑～青色として送ってもらったが、筆者が前に記した兵庫県産の藍黒色の個体はより濃藍黒色を呈しているものである)。

さて、カナブンの分布はどうであろうか。Waterhouse (1875) が “very common all the islands” と書いて以来、日本では普通種ということで現在にいたっているが、本当に日本全国に普通にいるのだろうか。

カナブンは北海道には分布していないというのが定説のようであるが、古く次のような記録がある。柳田 (1939) は函館近傍湯ノ川 (1936・VIII・7) を記録して “北海道より最初の報告である” とのコメントもつけている (もっとも Motschulsky (1860) が記録しているのは産地不明。Motschulsky の使用した材料は北日本、北海道産のものが多いようである)。アオカナブンの同定間違いということが考えられないこともないが (アオカナブンは北海道に分布しているようである)、近縁のクロカナブンも北海道にいないとされていたが、20年以上も前に採集されていたという記録 (函館産) が最近発表されている (荒木, 1991)。カナブンは確実に北海道に分布していると断言できる資料は現時点ではないように思われる (北海道を分布に入れた報文は竹内 (1940) があり、図鑑類では平山

(1940)がある。松村(1931)では“北海道に産せざる如し”と書かれている。最近では Mikšić (1977)も北海道を産地として記録している)。

ついで東北地方はどうであろうか。筆者が文献調査をした限りでは、青森県と秋田県でのカナブンの記録には出会っていない。岩手県は竹内(1940)の報告に“殻斗科植物の樹液に集来するもあまり多からず”とあり、産地データなどがまったくない。

宮城県の記録は、次のようなものがあった。山路(1935)には種名のみにてコメントなし。渡辺(1937)には“カナブンは僅か1♀(宮城県・金華山島)しか採集出来ていない”とある。宮城県仙台第二高等学校生物部の報告(1987)では“カナブン7-8月”とあって、産出についてのコメントはない。吉越(1987)は仙台北西丘陵(北山)のクヌギの樹液から1ex.を記録している。渡辺(1989)でも、カナブンは少ないのか、東根と荒島の2例しか収録されていない。

山形県は、板垣(1964)によると“カナブン(*Torhorrhina*属), 低山地, 平地”とあるが、具体的な記録その他コメントがない。桜井(1984)によると、カナブン酒田山-飯森山, 鶴岡市-金峰山の2例のみで、産地についてのコメントはない。酒田市の飯森山, 周辺のクリ林にアオカナブン, カナブン, クロカナブンの3種が豊産していたが、近年はクロカナブン, カナブンの2種の姿をほとんど見るができなくなったともある。

福島県は、蜂谷(1976)によると、カナブンは夏の盛りに雑木林の樹冠上を飛ぶこともあるとしているが、具体的な産地は示されていない。さらに真黒川流域に産するというのでカナブンの名は出ている。

新潟県の記録は、中根・馬場(1960)にわりあいと多く見られ、Echigo: Shibata, Niigata, Mt. Yoneyama, Is. Awashima. Sado : Suhunegi, Katabe, Kawamoto, Mt.Donden. Ogawara-toge, Suizu, Tassha, Matsugashiがあげられている。長島(1978)は、新潟県西蒲原郡巻町角田山麓にカナブンのいると記録している。小池(1982)は、佐渡島と粟島を含む県下各地に分布するとカラー写真をつけて記録している。

以上のように、宮城、福島、新潟県には多い少ないはあるものの分布しているようであるが、青森県と秋田県でのカナブンの記録を見ることができなかった。最近、青森県在住の尾崎俊寛氏から東北地方のカナブンの分布についての情報を頂いた(1992・8 私信)が“青森県では採集したこともないし記録もないのではないか、山形県の記録はあるが名前だけなのであまりはっきりしない、岩手県

と秋田県に関してはおそらくいないものと思う”とのことであった。

次に、関東地方あたりまでの記録のいくつかを眺める。

茨城県では、日置(1973)によると“カナブン (*Torynorrhina japonica*) 多い”とある。小倉(1988)は水戸市の記録を1例あげているが、産出についてのコメントがついていない。

栃木県では、蓮見(1934a)は“アヲグロカナブン *Rhomborhina nigra* Saunder. 栃木県那須郡黒羽字堀之内地内でケバネカナブンに酷似して著しく赤褐色のカナブンを採集”という面白い解説をしている。また、前掲の福田(1935)がある。稲泉(1972)の記録では和名だけしか出てこない。

群馬県では、小板橋(1935)が“カナブン発生期6月上旬より9月上旬までの間、クヌギ又はナラの樹間に多数集合し樹液を吸収し居るのを多く見る。極めて普通種なり”と報じている。須田(1985)は沼田市、伊勢崎市の記録を行なっているが、コメントはない。

埼玉県では、戸田市立郷土博物館(1989)にコメントはついていないが2カ所の産地が記録されている。

富山県では、田中(1939)による古い記録があるが、こちらも種名のみで山地帯に産するというコメントがあるのみ。

千葉県では、沼田・大野(1985)には単に種名のみ。山崎(1985)では産地は多く記録してあるがコメントはない。

東京を中心とした関東地方、伊豆諸島、伊豆半島には、カナブンはまず普通にいるのではないだろうか(野村, 1969, 石田, 1973~1986)。

長野県では、降旗(1979)が述べているようにカナブンは暖かい地方に分布する種類で、県南部の伊那地方、木曾地方などでみることができるといった状況のようである。

そしてここから西南の本州各地には普通にいる種となるようであり、その分布は石田・藤岡(1988)によると、本州、粟島、佐渡、伊豆(大島、利島、新島、式根島、神津島)、四国、高知沖ノ島、九州、奄岐、平戸島、対馬、大隅黒島、屋久島、済州島、朝鮮半島、中国となる。

日本では屋久島が一番南の分布地のようである。朝鮮の状況はKim(1978)によると割合広く分布しているようであり、個体数もそれほど少ない種ではないように思われる。Mikšić(1977)の有名なモノグラフによると、検視標本のな

かに Hokkaido 1 ♂, Taiwan 1 ♂ 2 ♀ といった注目すべき標本があることがわかる。台湾に本種が分布していることを報じているのは、この論文以外知らない。中国大陸ではどのように分布しているのかよくわからないが、Mikšić (1977) はわりと産地を書いている。中央から南のほうに広く分布しているのではないだろうか。筆者の手許にも中国産カナブンと思われる標本が何頭かある。♂交尾器は日本産のものとはあまり違いはないが、厳密に見ると若干の相違が見られる(個体数が少ないので色彩変化についてはあまり目立った点は見られない)。また、ベトナム北部には亜種 *ssp. tonkiniana* (Reuter, 1965) を産し、筆者の手許にも 2 ♂ がある。こちらの♂交尾器のほうが日本産により似ているが、やや光沢があり色彩は緑色を地に若干赤味がかかった色をしている。

分布がかなり広い種であり、中国大陸あたりにも多く産するのではないかと考えられる。日本では北海道ならびに青森、秋田県あたりの分布状況がよくわからない種である。台湾に分布しているかどうかよくわからない。日本に普通に見られる種といえそうであるが、全国的に普通種とはいえないと考えられる。自然変化、環境変化で都市部あたりでは次第にお目にかかり難くなったり、なりつつあるようにも思われる。

(付記) 本校脱稿後、酒井(1993)による美しいカラー図版付きの“日本および台湾産のカナブン類”なる論文が発表された。そのなかでカナブンの色彩変異についても言及しているし、島嶼においてわずかながら地理的な変異も認められるといった興味ある記述もある。分布については北海道には分布せず、東北地方でも稀のようであるとも述べている。

参考文献

- 荒木 哲 (1991) 北海道からのクロカナブンの記録, 月刊むし (250):14.
 Arrow, J., (1913) Notes on the Lamellicorn Coleoptera of Japan and Descriptions of a few Species, Ann. Mag. Nat. Hist., 8, xii:396.
 Burmeister, H., (1842) Hand b. der Entom. III (Berlin) p. 199, 778.
 福田敏夫 (1935) 宇都宮付近昆虫雑報, 昆虫界 3 (22):558.
 蜂谷 剛 (1976) ふくしまの昆虫, ふくしま文庫 24:150 (福島中央テレビ)。

- Harold, E.v., (1876) Bericht über eine Sendung Coleoptera aus Hiogo,
Abhandl. Nat. Ver., Bremen, V:127.
- 蓮見重智 (1934a) 栃木県黒羽町附近のこがねむし科目録, 昆虫界 2(8):233.
- 蓮見重智 (1934b) 分布三件, 昆虫界 2(11):580.
- Heyden, L. v., (1879) Die Coleopterologische Aubeutedes Prof. Dr. Rein in Japan
1874-1875, Deut. Ent. Zeit., X X III, Heft. II:346.
- 樋田清砂 (1937) 三重県産金亀子科及び鍬形虫科目録, 昆虫界 5(35):56.
- 日高敏隆監修 (1982) 小学館の学習百科図鑑 (37) 甲虫のくらし, p. 27
(小学館・東京)
- 日置正秀 (1973) 茨城のコガネムシ, るりぼし (1):2-3.
- Hope, F. W., (1841) Description of some new Lamellicorn Coleoptera from Northern
India, Trans. Ent. Soc. London, II:64.
- 伊賀正汎 (1955) 原色日本昆虫図鑑 (2) 甲虫編, 増補改訂版,
Pl. 32, f. 696, 697, p. 107 (保育社・大阪)
- 稲泉三丸 (1972) 栃木県の甲虫の仲間, 栃木県の動物と植物, p. 465
(下野新聞社・宇都宮)
- 石田正明 (1973a) 伊豆・式根島のコガネムシ主科について,
月刊むし (32):32-40.
- 石田正明 (1973b) 伊豆・利島のコガネムシ主科について,
東京経済大学人文自然科学論集 63:133-157.
- 石田正明 (1984a) 伊豆・神津島のコガネムシ主科について,
東京経済大学人文自然科学論集 66:39-49.
- 石田正明 (1984b) 伊豆半島のコガネムシ主科について,
東京経済大学人文自然科学論集 68:43-60.
- 石田正明 (1985) 武蔵・国分寺周辺の鯰角群,
東京経済大学人文自然科学論集 71:91-109.
- 石田正明 (1986a) 東京杉並区のコガネムシ主科相の変遷,
東京経済大学人文自然科学論集 74:83-96.
- 石田正明 (1986b) 板橋区のコガネムシ上科, 板橋区昆虫類実態調査 93:58-60.
- 石田正明・青木 隆 (1985) カナブンとアオカナブン, SAIKAKU (1):1-2.
- 石田正明・藤岡昌介 (1988) 日本産コガネムシ主科目録 (第一版補訂版),
LAMELLICORNIA 別冊 2.

- 石田正明・伊藤敏仁 (1976) 伊豆・新島のコガネムシ主科について (II),
月刊むし (66): 7-12.
- 板垣輝彦 (1964) 山形県産甲虫類の分布資料, 山形昆虫同好会会誌 2(1): 6.
- 加藤正世 (1933) 分類原色日本昆虫図鑑第八輯, pl. 16, f. 1 (厚生閣・東京)
- 加藤正世 (1935a) アヲグロカナブン内地に産せず, 昆虫界 3(13): 104.
- 加藤正世 (1935b) 主要金亀子科の分類 (3), 昆虫界 3(17): 286.
- Kim, C. W., (1978) Distribution Atlas of Insects of Korea, Series 2. Coleoptera,
p. 381, pl. XXVII, sc52a.
- 小寺正文 (1933) アヲカナブン (*Rhomborrhina*) とカナブン (*Rhomborrhina*
japonica) に就いて, 関西昆虫雑誌 1(2): 3.
- 降旗剛寛 (1979) 長野県昆虫図鑑 (下), p. 126 (信濃毎日新聞社・長野)
- 小池 寛 (1982) 新潟県昆虫図譜 (下), p. 58 (新潟日報事業社・新潟)
- 小坂橋秀治 (1935) 北甘楽郡に於ける昆虫目録, 昆虫界 3(18・19): 382.
- 小倉健夫 (1988) 水戸市千波湖周辺の昆虫, るりぼし (12): 10.
- Kolbe, H. J., (1886) Beitrag zur Kenntnis der Coleoptera—Fauna Korea,
Arch. f. Naturg., 52: 139-240.
- 黒沢良彦 (1985) 原色日本甲虫図鑑 (II), pl. 72, f. 10, p. 410 (保育社・大阪)
- Lewis, G., (1887) On the Cetoniidae of Japan, with Notes of new Species,
Synonymy and Localities, Ann. Mag. Nat. Hist., XIX(5): 196-202.
- 松村松年 (1898) 日本昆虫学 (常華書房・東京)
- 松村松年 (1906) 日本千虫図解 第三卷, pl. 47, f. 5, p. 81 (警醒社)
- 松村松年 (1931) 日本通俗昆虫図説 第三卷 甲虫之部, pl. 28, f. 6, p. 120
(春陽堂・東京)
- Mikšić, R., (1967) Revision der Gattung *Rhomborrhina* Hope,
Ent. Arb. Mus. Tierk. Dresden, 35: 267-335.
- Mikšić, R., (1977) Monographie der Cetoniidae der Orientalischen und paläarktischen
Region, Band. 2: 261-264.
- 宮城県仙台第二高等学校生物部 (1987) 宮城県牡鹿町網島産昆虫目録.
- Motschulsky, V. I., (1860) Insects du Japan, Etnd. Ent. tome, 9: 4-39.
- 長島義介 (1978) 角田山の博物誌, (巻町双書 第26集)
- 中根猛彦 (1979) Leiden自然史博物館にある日本産甲虫標本,
北九州の昆虫 26(1): 1-2, pl. 1.

- 中根猛彦・馬場金太郎 (1960) 新潟県の金亀子虫類,
市立長岡科学博物館館報 (4): 8.
- 新島善直・木下栄次郎 (1923) こがねむしに関する研究報告 (第二). 我国ニ産
スルこがねむし及其分布, 北海道帝国大学農学部演習林研究
報告 Vol. 2, No. 2: 156-157, Taf. V, fig. 16.
- 野村 鎮 (1969) 伊豆諸島産コガネムシ主科の動物地理学的研究,
昆虫学評論 21(1): 71-94, pl. 8.
- 沼田 真・大野正男 (1985) 房総の生物, p. 223 (河出書房新社・東京)
- Okamoto, H., (1924) The Insect Fauna of Quelpart Island,
Bull. Agr. Exp. St. Gov. Gen. Chosen, Vol. 1, No. 2: 179.
- 酒井 香 (1993) 日本および台湾産のカナブン類, 月刊むし (273): 3-9.
- 桜井俊一 (1984) 山形県の甲虫類 (IV), 山形昆虫同好会会誌 (13): 19.
- Schenkling, S., (1921) W. Junk Coleopterorum Catalogu Pars. 72. Scarabaeidae :
Cetoninae : 63.
- 関 公一 (1933) 御影町附近産の甲虫目録 (其の一), 昆虫界 1 (3): 252.
- 関 公一 (1934) 大阪・神戸附近の金亀子虫, 昆虫界 2 (9): 310.
- 須田 享 (1985) 群馬県の甲虫類, 群馬県動物誌: 336.
- 竹内誠一 (1940) 岩手県甲虫誌 第一巻: 116 (自刊).
- 田中忠次 (1939) 黒部川流域産甲虫目録 (2), 昆虫界 7 (64): 39.
- 戸田市立郷土博物館 (1989) 戸田市の昆虫 3. 甲虫類, 戸田市動物誌: 167.
- 上田恭一郎 (1970) シーボルトその標本と日本の昆虫学 1~3,
インセクタリウム Vol. 27, No. 1-3.
- 渡辺福寿 (1937) 森林動物相調査報告 第一輯 金亀子科, p. 79-80, pl. 20, f. 41
(青森営林局)
- 渡辺福寿 (1991) 日本樹木害虫総目録 (復刻版) p. 12 (有明書房・東京)
- 渡辺 徳 (1989) 宮城県の甲虫, p. 149 (日本鞘翅学会)
- Waterhouse, C. O., (1875) On the Lamellicorn Coleoptera of Japan,
Trans. ent. Soc. London, Part. 1: 113.
- 山路賀藤次 (1935) 宮城県加美郡色麻村産甲虫類, 昆虫界 3 (15): 177.
- 山崎秀雄 (1985) 千葉県のコガネムシ主科, 千葉生物誌 35(1): 15.
- 柳田 勇 (1939) 函館近傍産鞘翅目に就いて, 昆虫界 7 (67): 520.
- 吉越 肇 (1987) 仙台北西丘陵の甲虫相, 東北の自然 (34): 3-17.